

第 155 回定例研究会開催

現地研究会－玉川上水を巡る

昨年、山崎農業研究所の前所長、安富先生が「武蔵野・江戸を潤した多摩川 多摩川・上水徒歩思考」を出版されたこともあり、農業土木との関係が深い、武蔵野台地の農業用水と江戸の町の生活用水を支えた玉川上水を訪ねての現地研究を 10 月 29 日に開催しました。現地見学に先立ち、羽村郷土歴史館に隣接する市の集会場、清流会館で安富先生から 1 時間ほど話題提供していただき、午後からマイクロバスに乗って、いくつかの地点を実際に見学しました。当日の大まかな工程は以下の通りです。

11:00～12:30 安富先生の講演と意見交流；羽村市清流会館 ⇒ 12:40～13:10 羽村堰見学⇒
13:10～13:30 羽用水（車窓）⇒14:30～14:50 府中用水堰（青柳）⇒15:30～16:00 野火止用水分水堰⇒16:40 千川上水分水点（車窓）⇒17:00～17:10 三鷹～井の頭公園間の玉川上水（車窓）⇒17:30～19:30 懇親会（吉祥寺）

当日は、玉川上水・分水網を生かした水循環都市東京の再生に取り組んでいる中央大学山田研究室の学生さん 5 名も参加し、全部で 21 名が現地研究会に参加されました。

羽村堰

羽村堰は多摩川を水源とした玉川上水の起点で、固定堰の部分と可動堰の部分で構成されています。投渡堰とは堰の支柱の桁に丸太や木の枝を柵状に設置する方法で、多摩川本流が増水した場合、玉川上水の水門の破壊と洪水を回避する目的で、堰に設置した丸太等を取り払って多摩川本流に流す仕組みです。この方法は堰が設置された 1654 年（承応 3 年）からほぼ変わらず現在に至っています。この羽村取水堰から玉川上水土手の約 1km の間は桜の名所でもあります。



羽村堰



取水堰直下流の玉川上水と桜並木

府中用水

府中用水は国立市・府中市を流れる約 6km の農業用水路で、7 カ村用水とも呼ばれていました。国立市青柳にて多摩川から取水し、途中で谷保分水が分かれています。現在は灌漑用水と都市排水路として



安富先生講演；清流会館（羽村市）

使用されています。府中用水は玉川上水と関係が深く、その失敗作という説があり、安富先生もその説を押ししています。武蔵野台地に水を乗せるためには、できるだけ緩い勾配で多摩川沿いに並行して水路を走らせ、自然に台地に乗るように路線をとらなければなりません。この形式は羽村堰からの水路の配置とそっくりです。当初はこの青柳地点から武蔵野台地に乗せて四谷大木戸まで水路を伸ばそうとしたが、途中、野川、調布などの低地部にぶつかってしまい、水路を延伸することが出来ずに断念したといわれています。



府中用水取り入れ口

野火止用水

多玉川上水の開削工事に関わっていた川越藩主松平信綱が、玉川上水から領内の野火止（新座市）への分水が許され、野火止用水を作らせました。野火止用水は生活用水としてだけでなく、農業用水としての性格を強く持ち、武蔵野台地を大いに潤したといわれています。野火止用水の貫通により、川越藩では農民や家臣を多数入植させ、大規模な新田開発を行いました。野火止用水と玉川上水の工事時期はほとんど重なっており、玉川上水完成から2年後には野火止用水が完成しています。戦後、本来の目的がなくなり、排水路化が進んでしまったため、東京都水道局は一時玉川上水からの分水を止めてしまいました。その結果、水質悪化が顕著になり、埼玉県と新座市が中心となって「野火止用水復原対策基本計画」を策定し、清流を取り戻す活動が取り込まれました。現在では鯉が泳ぐほどの清らかな流れを保ち、流域住民の憩いの場となっています。



野火止用水分水地点

三鷹～井の頭公園

玉川上水は、小平から千川上水分水点までしばらく五日市街道に沿って流れ、千川上水分水点からは五日市街道を離れ三鷹駅に向かって直進し、三鷹駅を横断して井の頭公園の南側を通過して高井戸に到達します。ここからは新宿を通過して最終点である四谷大木戸までは、現在暗渠化され、直接目にはできません。この区間は野川、三鷹、仙川といった低地を巧妙に避けて路線が選ばれており、そのため、水の流れが複雑で、しばしば水難事故が発生し、「人食い川」と言われているそうです。三鷹近くには太幸治の入



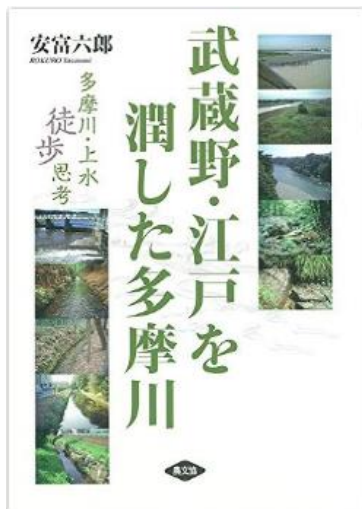
三鷹～井の頭公園（当日は暗くなっていたので以前撮影したものです）

水地点があり、井の頭公園内には、玉川上水で溺れた児童を助けようとして自ら殉職した永田町小学校教師、松本訓導の殉難碑があります。このほかにも水難事故に関する記録があり、このあたりの水の流れの陰しさを連想させます。

詳しくは安富先生の著書をぜひお読みください

武蔵野・江戸を潤した多摩川 多摩川・上水徒歩思考 安富六郎著

武蔵野・江戸にとって多摩川からの利水、玉川上水の開削は悲願であった。水田地帯と異なる台地開発はどのように行なわれたのか。野火止用水、青山上水、三田上水、千川上水など、現場を歩き実証的に考察する。



[目次]

第1部 多摩川源流を訪ねて (序 源流へのみちのり

河口は多様な生きものの生息場所

河口周辺の今昔

多摩川と江戸を結ぶ羽田の水運

東海道の大橋一六郷橋と多摩川大橋 ほか)

第2部 武蔵野・江戸を潤した多摩川の上水・用水 (玉川上水の謎、野火止用水開通の風景、まぼろしの青山上水、千川上水再発見、三田上水紀行)

定価 1700 円 (税抜き) 会員特価 1,500 円 申し込み先: 山崎農研

羽用水について

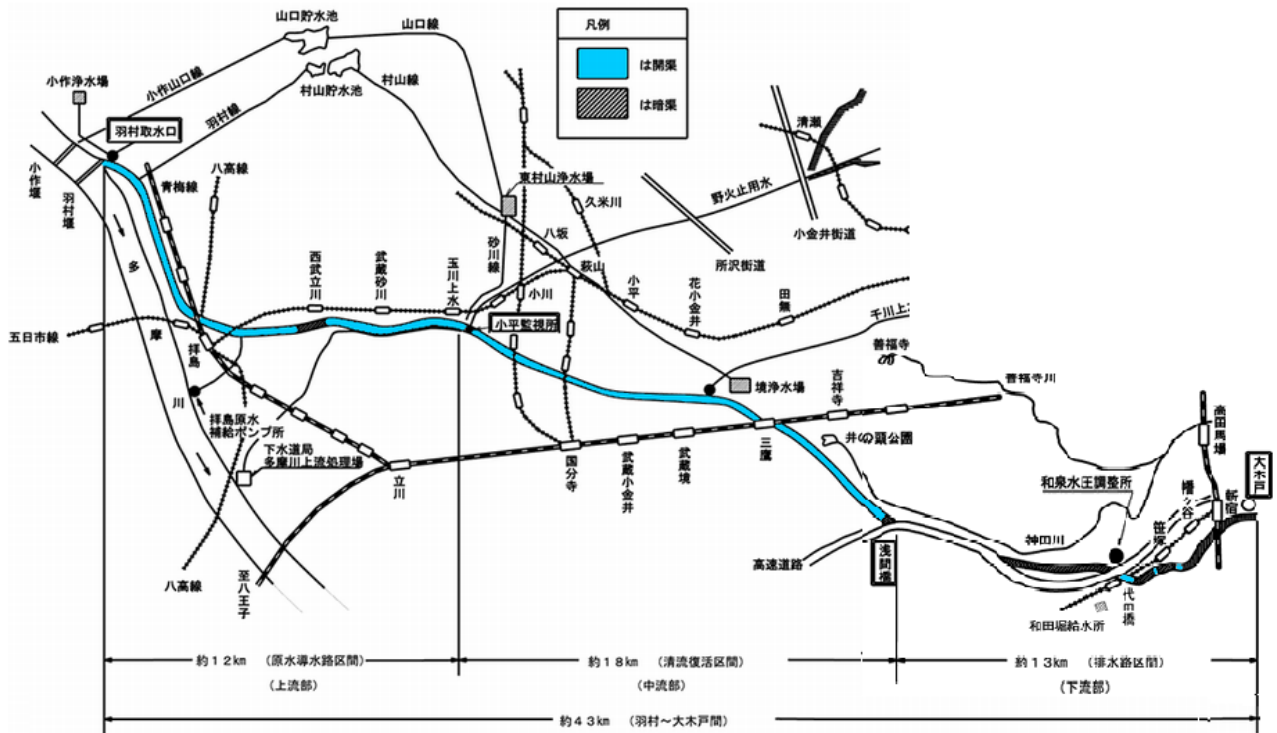
今回は直接玉川上水には関係ありませんが、羽村堰のすぐ上流に、やはり江戸初期に築造された羽用水と、今でも残る水田地帯を車窓から見学しました。羽用水のことは詳しい記録が無いので江戸時代のことははっきりしたことはわかりませんが、昭和 50 年頃の記録では、用水路延長 1.0km、受益面積 8.5ha、取水量 0.2m³/s とかなり小規模な用水路で、現在でも水田用水として使用されています。このあたりは河岸段丘が 2 段になって、段丘の崖縁には湧水が見られます。縄文遺跡が多く見られ、その中でも精進バケという埋蔵文化財指定場所では縄文中期 (約 3500~3500 年前) の竪穴式住居跡や調理施設と思われる集積土杭や貯蔵施設や土器が見つっています。不思議なことに、弥生式の遺構は全く見つかっておらず、古墳時代になって再び人が住んでいたことを思わせる遺構が見つっています。東京では珍しい水田の田園風景が残されている地域で、地域内には大賀ハス (千葉県検見川で発見された古代ハスを移植) の栽培田も見られます。



羽用水の受益水田



カフェ店横の羽用水に設けられた水車



玉川上水概況図

機関誌「耕」および電子耕の原稿募集

機関「耕」や電子耕をより開かれた広報媒体として活用していただくために、会員から広く投稿を呼びかけています。特集テーマなどは編集部から原稿を依頼していますが、会員の自主的な投稿も大いに歓迎します。内容は、農業や食料、環境問題だけでなく、その時々^々の社会的出来事、政治、経済など範囲は問いません。山崎農業研究所の活動趣旨に沿うものであれば内容は問いません。提言、意見、研究発表あるいはエッセイ的なものでも構いません。

【機関誌「耕」】文字数 1500～5000 程度 【電子耕】文字数 800～1200 程度

投稿方法；特に問いませんが、編集作業の効率上、できれば電子メールで Word などのテキストファイルで投稿していただければありがたいです。なお、写真、図表などを使用される場合（機関紙「耕」のみ）はできるだけ鮮明なファイルを同封してください。

投稿先 ；E:mail y.masunaga@ntc-c.co.jp

山崎記念農業賞基金の寄付募集

山崎記念農業賞は、会員の皆様からの寄付からなる基金で運営していますが、ここ 5 年間寄付を募っていないこともあり、基金残金が残りが少なくなっています。山崎記念農業賞の主な支出は、授賞対象者調査費（主に交通費）、受賞者の旅費交通費（2 名程度）と表彰楯製作費です。

大変心苦しい限りですが、どうぞ山崎記念農業賞の趣旨をご理解いただき、ご協力をお願いいたします。基金につきましては、下記の郵便局またはみずほ銀行をご利用されるようお願いいたします。なお、通信欄に山崎記念農業賞募金とお書きください。

会費納入のお願い

山崎農業研究所は、会員の会費や寄付で財政のほとんどを賅っています。会費納入率が昨年度は 83% でまだ十分とは言えない状況にあり、研究所の運営に支障をきたす要因となっています。まだ会費を納められていない会員におかれましては、是非会費納入にご協力くださるようお願いいたします。

入金先； 郵便貯金 山崎農業研究所 口座番号 10130-79304751

みずほ銀行 普通預金 山崎農業研究所 四谷支店 (036) 口座番号 8043304